

東洋の宗教史が西洋學者に投じたる

二大謎問

本會研究所長
文學博士 加藤 玄智

本問題の一は、印度の宗教史上に於て、釋迦自身の佛教が果して宗教かどうかと云ふ疑問である。彼れ西洋學者は猶太教、基督教、回教の如き宗教學上神人懸隔教のみに慣れてをる眼で釋迦自身の佛教を見るに、それは宗教と云へるかどうかと云ふ疑が起らう、それは一つの謎である、何ぜならば釋迦の説法四諦八聖道には、客觀的に信仰の對象たる神が出て居ないからである、ヤーヱーもなければアラーム無い、それは一見して無神論の如く見える、かう云ふものがどうして宗教であらうか、さう云ふものを説いた人がどうして宗教の開祖であつたのだらうか、是れ彼等の立場からは永久に解せぬ謎である、然るに爰に東西宗教の比較研究から、神人懸隔教以外に神人同格教と云ふものがあつて、神は客觀的存在としては見ぬが、主觀的に自己分内の事として神と人とが釋迦丈六の色身中に融合々體して存してをると云ふ點に眼が着けば、釋迦自身の宗教は無神論どころか、正真正銘の有神論であると云ふことが分り、爰

に釋迦の宗教も立派に宗教であると云ふ結論に達して、此の謎は容易に解決されて了ふのである。

次に彼等には大なる謎であるのは、日本の國家と天皇の御位置である、換言すれば日本の國體の不可解である、是れ又彼等としては無理の無い點で、彼等の現下の主權者は皆單なる人間である、フシントンでも大統領だ、獨逸のカイゼル將又英國のジョージ陛下何れも皇帝でも矢張人間に過ぎない、然るに日本は古往今來、天皇は明津神、現人神に在するのであつて、即ち神皇である、ひじりの神（日知神）聖上に在し、今の神即ち今上に在するのである、此日本人の國體信念は古今變つて居らない、故に今日の日本は憲法治下の國家であり乍ら、神政々治の國家である、こゝが彼れ西洋人には如何にも不可解の點であらうが、日本歴史に心を潜めた日本人としては當然過ぎる程當然の事實であつて、儒教が來、佛教が來、如何に日本の精神文化が進んでも、その時代その時代の知識程度で、神皇信仰を保持して來てをるところとは炳として日星の如しである、それだから日本人には當然の事實だが、國情を異にする外人には不可解の謎と云ふことになる、然し若し一度宗教には神人懸隔教以外に神人同格教があり、而て之れが時間の上からは自然教期から文明教期に亘つて日本には一貫して存してをる日本人の國體信念であり、我が國體の本質眞諦、その核心が爰に存してをることが分かれば、此の第二の謎も容易に氷釋することであると思ふ。今夕の講演は此二點を簡單に述べて静岡市に於ける藤崎講演演出演の責を塞ぐこととする。